

RSCNews

Ritsumei Support Center

Rits
Ritsumeikan

夏号 2007 No.6

Ritsumeikan University Center for Development and Support of Higher Education News Letter



本学FDのさらなる発展に向けて

FDに対する教員の認識

文部科学省の公的文書に「FD (Faculty Development: ファカルティ・ディベロップメント)」という用語が初めて登場したのは、1987年の臨時教育審議会第三次答申であり、「教員の評価については、大学の自己評価の一環として、大学の資質の開発向上 (ファカルティ・ディベロップメント) に努めることが望まれる」と表記されています。その後、1991年の「大学設置基準の大綱化」として知られる大学審議会答申「大学教育の改善について」では、「教員の教授内容・方法の改善・向上への取り組み」をFDと表現しており、これらは狭義のFDといえることができます。

一般的にFD活動に対する教員の認識は、「授業アンケート」の実施や「教育実践フォーラム」、「公開授業と研究会」をはじめとする企画に参加することであると考えられ、狭義のFDに偏る傾向が見られました。この狭義のFDでは、対象領域が限定され、本学の教職員が日々力を注いでいる教学的取組を矮小化してしまう危険性をはらんでいるとともに、研修やフォーラムといった企画への参加のみがFD活動であると認識される可能性もあります。

本学におけるFDの定義

これまで、本学では全学レベルや学部・研究科レベル、個々の教員レベルなど様々な段階でのFDを進めてきましたが、FDについて明確な定義を定めるには至っていませんでした。前述のとおり、多くの教職員がFDと聞いて連想する活動内容は限定されていたことから、学生の多様性やFDの義務化が進む中で、本学において教育の質を向上・保証するためのFDを一層推進するためには、まず、全構成員でFDに対する認識を共有することが必要であると考えました。

そこで、2006年度に「授業改善の支援に向けた調査・検討ワーキング」を立ち上げ、学内のFD活動に関する実態調査を行ない、現状を把握した上で、FDを以下の通り定義づけ、全学で確認しました。

FD活動：建学の精神と教学理念を踏まえ、学部・研究科・他教学機関が掲げる理念と教育目標を実現するために、カリキュラムや個々の授業についての配置・内容・方法・教材・評価等の適切性に関して、教員が職員と協働し、学生の参画を得て、組織的な研究・研修を推進するとともに、それらの取組の妥当性、有効性について継続的に検証を行い、さらなる改善に活かしていく活動。

CONTENTS

P1 ▶ 本学FDのさらなる発展に向けて

P2 ▶ 授業アンケートの第2ステージへ

P3 ▶ 本学教育に対する第三者の意見紹介、学部・教学機関の教学的取組紹介

P4 ▶ 新任教員研修を開催しました

P5 ▶ 教育実践フォーラムを開催しました

P6 ▶ 新任教員対象 ランチャイムFDサロン ほか

P7 ▶ 学外FDフォーラム探訪記

P8 ▶ 紀要の原稿を募集しています、新着図書情報

ここで重要なことは、FDの目的が教育における理念や目標を実現することであり、対象領域が個々の授業のみならずカリキュラムを含むことです。また、FDの主体は教員としながらも、本学の特長である「教職協働」と「学生参画」を重視することを明記しました。さらに、FDは教員の個人的な授業改善に頼るものではなく、組織的な実施を保証するものであること、そしてその成果や効果を継続的に評価・検証し、さらなる改善につなげることを謳っています。

FDのさらなる発展に向けて

これまで本学では、多くの学部・研究科で授業の改善・標準化のために定期的に担当者会議を開催しています。また、到達度検定試験の開発や、試験講評の実施、標準シラバス・標準テキストの作成、学生との授業懇談会を開催するなど、学部・研究科ごとのFDを

組織的かつ実践的に進めています。これまでは、学部・研究科ごとに存在する企画委員会等がこれらのFDについても担っていましたが、今後は、全学FD委員会を立ち上げるとともに、学部・研究科ごとのFD委員会を設置して、教学改善活動や学習支援活動の更なる飛躍に向けて取り組みを進めていきたいと考えています。

また、大学教育開発・支援センターは、全学共通の教員研修プログラムや、大学教育評価・検証システムの開発・運用、学部・研究科の垣根を超えたピア・レビューの仕組み構築、年度ごとの学生実態調査・分析研究をはじめとした、全学的に取り組むべきFDを主体となって進めるとともに、学部・研究科が取り組むFDについても、側面的に支援を行っていきます。

このたびのFD活動の定義に基づき、全学が一体となって、教学改善に資するFDを継続的・体系的に進めていきたいと思っています。

TOPICS

授業アンケートの第2ステージへ

～2006年度後期結果の活用状況と2007年度の展開について～

授業アンケートは、その結果をどのように活用するかが重要であるといわれています。本学内でも、各教員、各学部、全学で授業アンケートの結果をヒントに、授業や教学の改善に向けた努力が続けられています。

各教員の取り組み

2006年度後期授業アンケートの結果公開に伴って、各先生方の担当科目についてコメントを募集したところ、多くの先生からコメントが寄せられました。その内容は、今後の授業での改善点や、受講生への継続した学習のためのアドバイスなどでした。

各学部の取り組み

各学部でも、執行部や教授会で授業アンケートの結果についての議論が活発に行われています。特に、学生の時間外学習時間や、授業改善に関わる意見交換の状況については、多くの学部が課題として注目しています。

全学での取り組み

大学教育開発・支援センターでは、これまで実施してきた授業アンケートの経年比較を行うとともに、授業アンケートをテーマとしたフォーラムを開催しました。ディスカッションでは、授業改善に関わる多くのトピックについて積極的な意見交換がなされ、アンケート結果について教職員と学生が率直に議論することの必要性が確認されました。

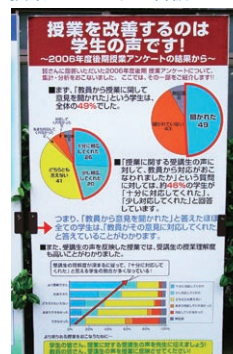
2007年度の取り組みについて

2007年度前期は、セメスター中盤に実施する意見交換ツール「インタラクティブシート」の実施期間を2週間に延長し、積極的な活用を呼びかけた結果、表のように多くの学部で前年度を上回る実施がなされました。また、セメスター中キャンパス内に多くの立看板を設置し、「授業を改善するのは学生の声である」ことをアピールしています。

また、授業アンケートの掲載項目について寄せられた声を反映させ、2007年度前期についてもいくつかの改善を行っています。

授業アンケート結果や活用状況は、センターのwebサイト(学内専用)に掲載しています。是非アクセスしてください!

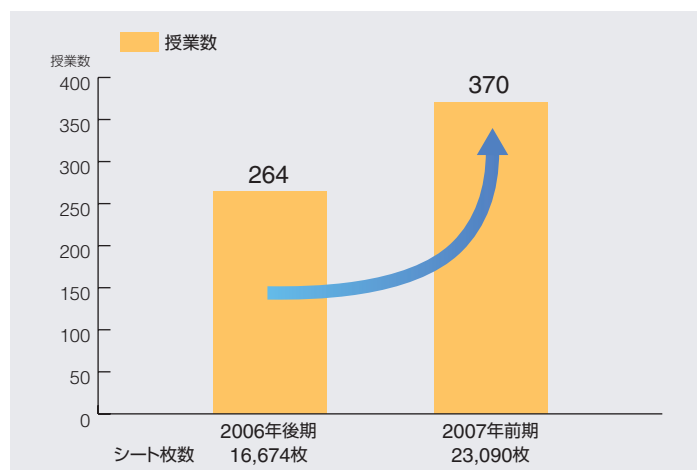
授業アンケート立看板



授業アンケートwebサイト



◆インタラクティブシートの実施状況



本学教育に対する第三者の意見紹介

本学における2005年度の認証評価取得においては、大学基準協会から全学に関わる教学面の改善事項として、「シラバスの内容や量に精粗が認められるので、学生の立場に立ったものへの改善が望まれる。」との指摘がありました。それを受け、本センターではシラバス掲載項目の見直しやガイドブックの作成・配布、執筆後の点検体制の強化などの改善に取り組んでいます。

このたび、シラバスに視点を置き、東海大学教育研究所長の安岡高志先生に原稿を執筆いただきました。

さて、本学のシラバスは安岡先生がおっしゃるようなものになっているのでしょうか…？

シラバスの前に覚悟が必要

安岡高志（東海大学教育研究所長、理学部教授）

文部科学省の2004年度の調査によれば、99%の大学がシラバス（syllabus）を既に導入している。しかし、シラバスは読まれているようでも、学生が勉強するようになったようでもないのはなぜか。その答えは読む必要のないシラバスを書いているからである。

大学設置基準には「1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし…」となっているが、日本の大学の大多数は授業の学修時間が15時間なので、残りの30時間の学修は授業外で行わせなければならない。したがって、シラバスは授業外の30時間の学修義務を書くものである。

学生が読まなければならないシラバスは、どのようにすれば書くことができるのか。結論から言えば、どのような技術を用いても授業そのものが変わらなければ、不可能である。従来の授業が教室外の学修を必要としないように組み立てられているのであれば、シラバスを導入しても教室外の学修が必要ないことには変わりはない。したがって、授業そのものを教室外の30時間を含めて組み立て直さなければならない。授業は学生が授業外の30時間の学修を行っていることを前提に進めなければならないし、そのためには学生が自分で学修ができるような教科書が必要である。試験問題にしても授業外の学

修内容も含めたものにしなければ、学生は決して授業外の学修に真剣に取り組むことはない。このような授業が開発されたとき、そのガイドラインとしてシラバスがはじめて必要になる。

学生に授業外の学修をさせるための手段として、レポートをはじめとする宿題を出したり、小試験を度々行うことがあげられる。しかし、学生に勉強させるためにはレポートや小試験を採点して、返却する必要がある。計画を書くのは易いが実行は困難なことであり、覚悟がなければできないことである。最も聞きたくない言葉は、そんなに試験をしたり、宿題を出すと学生がかわいそうといういいわけである。大変なのは、学生よりも教員である。

シラバスにもう一つ記載しなければならないことは、成績評価の方法である。学生がどのような努力をすれば、よい成績が得られるかを示す必要がある。厳格な成績とよくいわれるが、これは基準を高くして、ふるい落とすことではなく、単位制度に適した成績評価の方法に厳格にしたがうことを意味するものである。これも覚悟がなければできないことである。



学部・教学機関の教学的取組紹介

図書館からの学習支援 ～情報化社会の中で～

一柳 晋也（図書館サービス課）

大学における学びでは、多様なツールを使って情報を収集し、活用する必要があります。図書館では、そうした活動を支援するために様々な利用者教育を行っており、大きく分けて次の3点があります。

① 導入期教育としての図書館ガイダンス

新入生が大学での学びを円滑にスタートできるように、全学部を対象に正課授業やオリエンテーションの中で「図書館ガイダンス」を実施し、学術情報の収集法やデータベース活用方法を紹介しています。ガイダンスは各学部の学びのスタイルの違いを考慮しつつ、コンピュータを使って様々な情報源にアクセスし、そこで見つけた情報を自分の学習にどのように活かすか判断する力を身に付けてもらえるような構成になっており、インターネットを中心に情報が氾濫する現代に、学習に役立つ情報を得るための具体的なツール・方法を知ることができます。

② 学生の主体的学習を支援する図書館ガイダンス

学生ひとりひとりの主体的な学習支援のため、図書館ではセメスターごとに多様な講習会を実施しています。講習会では、RUNNERS（蔵書検索）の使い方や本学で導入しているデータベースをレベル別・目的別に組み合わせで紹介しています。

③ クラス、ゼミ単位でのガイダンス

ゼミや小クラスを対象に、教員の要望により授業内容に応じた図書館ガイダンスを実施しています。紹介する資料やデータベース、検索語はクラスのテーマにあわせた内容にアレンジしており、講師は専門のスタッフが担っています。

これらのガイダンスの中で、学生ライブラリースタッフ（以下、学生LS）が大切な役割を果たしています。現在図書館では、89名（衣笠56名、BKC33名）の学生LSが活動しています。学生LSは、正課で実施するガイダンスの補助や図書館企画の講習会の講師として活躍するほか、新着本の中からぜひ読んでほしいお勧め本の紹介を行って幅広い読書を促す活動など、各種図書館活動に貢献しています。

このほか、各図書館には専門のレファレンス（参考調査）ライブラリアンが、日々の学習や卒業論文・研究に向けた資料の収集を支援しています。

以上のように、図書館として、今後も学生の学びと成長を積極的にサポートしていきたいと考えています。

新任教員研修を開催しました

2007年度の新任教員研修は、教学部ガイダンスならびにFD研修で構成され、2日間に渡り開催しました。

教学部ガイダンス (参加者64名)

開催日時

3月30日(金) 9:15～11:05

スケジュール

- 9:15 教学部長からの挨拶
教学から見た立命館学園の現状と重点課題
- 9:30 教学体制について
事務機構／学部と研究科構成／全学横断プログラム／正課と課外 等
- 10:00 教学に関わる諸連絡
2007年度学年暦／授業／試験制度／各種手続き 等
- 10:25 ITに関わる教育支援
Webコースツール／QRコード／教室設備 等
- 10:45 質疑応答
- 11:05 終了

新任教員FD研修 (参加者53名)

開催日時

3月31日(土) 9:30～13:00

スケジュール

- 9:30 ガイダンス「大学教育開発・支援センターの教育支援」
- 9:55 ガイダンス「大学院におけるFD活動」
- 10:05 質疑応答
- 10:10 講演「より良い授業をするために」
- 10:40 ワークショップ「授業計画について考える
～シラバスと授業アンケートの利用～」
- 11:50 交流会 (ビュッフェ形式の昼食)
- 13:00 終了

新任教員FD研修は、「各教員が教育力量の向上に向けて、本学のFD活動について理解を深める。また、今後のFD企画に積極的な参加を促す契機とする」とともに、新任教員同士の横断的なネットワーク形成の一助となる機会を提供する」ことを達成目標としています。

ガイダンスでは、①本学における建学の精神や教学理念、②近年の高等教育情勢、③本学が取り組む「教育力強化」、について説明がありました。特に、本センターが取り組む具体的な教育支援活動について、それぞれの取組の教学的役割を明確にしつつ、細やかな紹介がなされました。また、大学院教育をめぐる動きとして、2005年9月の中央教育審議会答申『新時代の大学院教育』ならびに「大学院設置基準」の改正(2007年4月1日施行)について紹介があり、

大学院FDの義務化、成績評価の厳格化、人材養成目標の明確化、を通した大学院教育の改革が重点的課題になっている現状について紹介がなされました。

本センターの木野茂先生による講演「より良い授業をするために」では、大学進学率の推移や大学設置基準の紹介を通して、従来の「20世紀型教員」からの脱却が必要であることが説明され、より良い授業をするための工夫例が提案されました。また、講演後におこなわれるワークショップの参考となるよう、シラバス執筆の際の確認ポイントについても説明がありました。

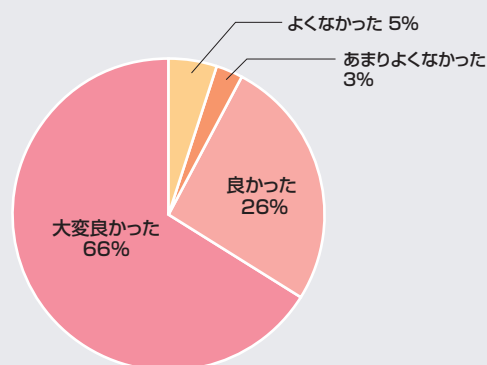
ワークショップでは、小グループに分かれ、各人が執筆した07年度シラバスを用いて、担当科目の実施計画について紹介するとともに、前述した講演を参考に、より良い授業をするための意見交換をおこないました。

すべての研修プログラム終了後には昼食交流会が開催され、新任・ベテランの先生方を交え、学部を超えた交流をおこなっていた様子でした。



◆参加者アンケートの回答結果

ワークショップ「授業計画について考える」



参加者からの声 (アンケートより抜粋)

- 初めて授業の進行に関する研修を受けたので、新鮮だった。
- 学生に自主的にいかに学ばせるかについて非常に参考になった。
- 他の先生方のシラバスを実際に見ることができ、どのような意図のもとに作成されたかを学ぶことができ、今後の参考として役立った。
- 新任教員にとって、ワークショップは大変有効なものであると感じたが、時間的に短く感じる。もう少し時間的余裕があれば、より充実した話し合いができ、新任教員の不安も軽減すると思われる。
- 昨今の学生の多様性、学力低下問題など、またそれをふまえた講義の工夫など具体的に教えていただいたことが有益でした。
- 新しく勤務する大学で授業を行うことに不安もありましたが、皆で話し合うことで多面的視点を得ることができました。



報告
2

教育実践フォーラムを開催しました

第1回「授業アンケート結果から授業改善を考える」

2006年度後期より改定した授業アンケートの集計結果や、過年度授業アンケートの経年比較を通して、立命館大学の授業における課題について、教員・学生双方の視点から検討し、意見交換を行いました。

衣笠

日時 5月9日(水) 18:00～20:00
司会 樋爪 誠 先生(大学教育開発・支援センター事務局長)
報告 木野 茂 先生(大学教育開発・支援センター教授)
 藤巻 正己 先生(文学部教授)
 横山 大輔 さん(国際関係学部2回生)

BKC

日時 5月10日(木) 17:30～19:30
司会 森本 朗裕 先生(大学教育開発・支援センター副センター長)
報告 木野 茂 先生(大学教育開発・支援センター教授)
 仲谷 善雄 先生(情報理工学部教授)
 黒田 真美 さん(理工学部4回生)

木野先生からの報告では、「1日の授業外学習時間が15分未満と答えた学生が6割を超えるという深刻な実態があり、その理由として『学習方法がわからない』『学習意欲がわからない』という



声が学生よりあがっている。授業において教員が受講生への学習指導を徹底する必要性がある。」「受講生の意見を積極的に授業に反映している授業ほど、受講生の授業理解度が高まっている。新入生アンケートでは、入学して2ヵ月後には5割を超える学生が授業や教員に抱いていた期待が落胆したと回答しており、センターからフィードバックするアンケート結果を積極的に授業改善に活かしてほしい。」との説明がありました。

学生の立場からは、質問項目が削減されたことにより、回答への負担が減ったものの、改善点を聞く項目が削除されたため授業の改善点が見えてこないのではという指摘がありました。また、授業アンケート結果が学生に公表されていることについて、ほとんどの学生がその事実を知らないため、公表の方法や広報について更なる検討をしてほしいとの要望が出されました。

学部の先生方からは、06年度後期アンケートにおける学部の分析結果や対応策、教員と受講生のコミュニケーション促進のための取組状況、学部カリキュラムにおける各科目の位置づけの明確化に向けた取り組み等について、報告がありました。

その後のディスカッションでは、学生が積極的に授業に取り組むためには授業の到達目標や展開を明確に示すことが必要であるとの議論や、学生が多様化している現状に合わせて授業スタイルも多様化することの必要性、学生の学習時間の短さについて主に議論がなされました。

第2回「授業における教員とTA・ESの役割を考える」

日時 【BKC】5月16日(水) 【衣笠】17日(木)
司会 沖 裕貴 先生(大学教育開発・支援センター副センター長)
報告 岡本 香織(大学院課職員)
 山田 和幸(教育開発支援課職員)

コメンテーター

森本 朗裕 理工学部教授 大学教育開発・支援センター副センター長(BKC)
 木野 茂 大学教育開発・支援センター教授(BKC)
 江原 武一 大学教育開発・支援センター教授(衣笠)

このたびのフォーラムでは、発表者がTAアンケートの集計結果やESアンケート／報告書の集計結果について発表し、コメンテーターが提示した討議のポイントに沿って、参加者がそれぞれの経験や立場を踏まえて熱心な討議を行ないました。

理系学部を擁するBKCでの討議は、実験系の科目でTAを使ってきた実績があることなどから、そうした授業でのTAの役割については肯定的考えに基づく発言が多かった一方、講義系の授業ではTAとESの区別が難しいといった意見が出されました。また、アルバイトではなくES自身の成長も念頭においた教育活動の一環だというES制度の理念は浸透しておらず、実態としては「学部生でもできるTAの仕事」といった受け止めが主流だといった意見もありました。衣笠キャンパスでは、TAの処遇問題についての発言が多く出されました。

今年度、大学教育開発・支援センターでは、ESの活用やESに係る業務の規程やガイドラインを整備し、今後4年間、学部・教学機関が安定的にES制度を運用できる体制を確立することを課題としています。整備される規程やガイドラインでは、ESの任用、業務内容、資格、処遇、危機管理体制、管轄部局、具体的な業務運用方法が明示されている必要がありますが、これらを、TA制度やオリター等などの制度と整合性を維持しながら制定していかなければなりません。また、TA制度についても、今後、ガイドライン等を整備したり、募集要項記載事項を詳しく定めたりすることで、制度の完成度を高めていく必要があることが、今回のフォーラムで確認されたと考えます。



5月29日(火)・30日(水)に衣笠キャンパス・BKCそれぞれで新任教員を対象とした「ランチタイムFDサロン」を開催しました。

授業実践に関わる相談・質問が出されたとともに、新任の先生方は授業で様々な工夫をされており、お互いがその実践例に興味深く聞き入っている光景が見られました。

以下に当日のQ&Aを一部紹介しますので、ぜひご参考ください。

Q 授業中の遅刻者が気になります。
何か対応策があれば教えてください。

A まず第1回目の授業で、この授業は開始時刻と同時に始まることを周知します。そして、毎回授業が始まる5分前には教室に行き、準備をおこないます。すると、学生も3週目くらいには時間通りに着席するようになりました。

Q 学生の集中力が散漫になってきたときの
対応策には、どのようなものがありますか？

A 映像資料を活用したり、パワーポイントを板書に切り替えたり、学生に質問してみたり、グループディスカッションを取り入れたり…、色々な授業方法を試してみます。このように授業方法を変化させることが、学生の気分転換、集中力の喚起につながるようです。

Q 学生の反応が把握し難い大規模講義では、
どのように授業を改善していますか？

A 定期的に簡単なアンケートを実施しています。例えば、「後ろのほうの座席はピンマイクの音が聞こえない」といった記述が最近あり、そういった状況に気付くことができました。教室にゆとりがあったので、受講生には前方の席に座るよう促すことで対応することができました。

Q 授業中に学生の発言を促すには、
どうしたら良いでしょうか？

A はじめはコミュニケーション・ペーパーで学生の質問を受け付け、次の授業で返答していましたが、量が多かったり、タイムラグがあったりしたので、授業内で直接手を上げさせるように変更しました。すると、学生は予想していたより積極的に手を上げて質問をしてくれます。段階的に行なったことで学生の抵抗も少なく、効果があったようです。

*今後のFDサロンは、以下の予定で開催します。

- 前期セメスター終了、授業の反省点について考える
開催時期：7月下旬
- 後期セメスター開始から1ヶ月、授業実践の交流から学ぶ
開催時期：10月下旬
- シラバスの執筆期間中、次年度の授業計画について考える
開催時期：12月中旬
- 後期セメスター終了、授業アンケート結果を活用する
開催時期：1月下旬



学生発信の授業改善に向けた活動を進めています

大学教育開発・支援センターは、学生の声を積極的に聞き、授業や教育システムを継続的に改善することが大変重要であると考えています。そこで、授業改善に興味・関心があり、本センター発信の授業改善活動に協力してくれる学生メンバーを昨年度から公募し、学生発信の授業改善に向けた取り組みを進めています。

◇ 学生メンバーの活動について

本学の学生に授業に関するヒアリング調査をおこなったり、他大学に訪問して事例を学び見聞を広めたり、学部・回生問わずに協力し合い、学生が授業改善のためにできることは何かを模索しています。学生メンバーは定期的にミーティングを実施していますが、現状調査が一段落し、現在は今後の取り組みについて企画・検討しているところです。

この取り組みに参加する学生は、それぞれが授業や教育について興味・関心をもっており、「学生メンバーの活動を通して、自分自身も勉強・成長できる」と語っています。また、「自分が発案したことが、実際に現実のものとなることにやりがいを感じる」という声もあります。

大学教育開発・支援センターでは、今後とも、学生発信の授業改善に向けた活動を支援していきたいと思っています。



学外FDフォーラム

探訪記

● オクラホマ大学におけるTA研修

大学教育開発・支援センターでは、本学における教育力強化を目的として、授業で学生に接するTAをはじめとした学生スタッフについて、研修プログラムを開発中です。そこで、長い歴史と充実したプログラムを持つオクラホマ大学のTA研修についてヒアリング調査をおこなってきました。

オクラホマ大学においてFDを担う部署とは

オクラホマ大学では、「教育革新プログラム(PII: Program for Instructional Innovation)」という部署がFDを担っており、3名の専門スタッフが所属しています。主な活動内容としては、教員やTAを対象とした研修や、ITを活用した授業支援、授業のコンサルテーション、各種調査などが挙げられます。州立大学であるもののコスト意識が高く、教員採用には多くの費用がかかっているため、優秀な教員を手放さないようにすることも本部署の重要な業務のようです。

TA研修(Training Program for Teaching Assistants)

オクラホマ大学ではTA研修が28年前から実施されています。年に1度(開講前である8月)、TAが効果的な学生指導をおこなうとともに、TA同士の教学的交流の促進を目的として、全学的にTA研修がおこなわれています。これは、学生サポート業務をおこなうすべての大学院生が受けなくてはならない必須の研修となっています。つまり、TA研修への参加なくしては、学内でTA業務をおこなうことは認められません。

TA研修は、ITA Program とAll-TA Programに分かれており、2つの研修プログラムは連携したものになっています。以下に各プログラムの概要を紹介します。

①ITA Program

(International Teaching Assistant Training Program)

このプログラムは、国際学生を対象としています。国際学生がアメリカで学生を指導するにあたり、直面するであろう異文化という壁を解消するための知識と技術を提供することを目的とします。プログラムは5日間に及び、①異文化理解、②授業への適応方法、③効果的なコミュニケーション方法、の3部で構成されています。

②All-TA Program

(All-Teaching Assistant Training Program)

このプログラムは、新しくTAになるすべての大学院生を対象としており、2日間を要します。つまり、国際学生がTAになる場合は、前述したITA Programも含め、7日間に及ぶ研修に参加しなくてはなりません。

プログラム1日目には、オクラホマ大学の教学方針や事務的連絡といった一般的なオリエンテーションがおこなわれます。オリエンテーション終了後、複数のトピックを設定した分科会が開かれ、各TAは、その中から特に関心を持った分科会を選ぶことになります。2日目は、①講義の方法、②ディスカッションの先導方法、③教室内問題の取扱方法、といった3つのスキル領域から構成されます。2日目のプログラムは、複数回に渡って同様の内容で開催されるため、TAは都合がつく日時を選択し、すべてを受講しなくてはなりません。

本学での活用にあたって

本学では、各研究科や個々の担当教員にTAの指導が任されているため、研修内容ならびに業務水準においてばらつきが存在します。これは、TAを対象に実施したアンケート調査の結果からも明らかとなっています。学部教学や個々の授業の独自性はあるものの、TAの教学的意義をはじめとした全学共通のトピックについては、オクラホマ大学のプログラムを参考に、全学的な研修を検討しなくてはなりません。その上で、各学部・授業の特徴に応じて別途研修を実施することが求められるでしょう。なお、オクラホマ大学におけるTA研修には、講義やグループディスカッション、ビデオ上映といった様々な指導法が盛り込まれており、TAの研修への参加姿勢・モチベーションを維持するためにも、ぜひこれらの指導法は参考にしたいと思います。

また、オクラホマ大学ではTA研修が長年実施されているため、教員や学部事務室の職員にもTAの教学的役割が浸透していると考えられますが、本学においては、前述したアンケートでも「教職員によってTAに求めることが異なる」といった意見が多く出されています。TAを利用する教員、TAの管理を担当する事務室の職員においても、TAの教学的役割や業務内容について認識の共有化を進める仕組みを考える必要があります。(金剛)

● 愛媛大学教育・学生支援機構主催「ファカルティ・デベロッパー養成講座」

去る3月26日、27日の両日、愛媛大学で開催された「ファカルティ・デベロッパー養成講座」に参加しました。講座には全国の大学から30名を超える参加者がありました。「FD活動」という言葉の理解は大学によって様々ですが、愛媛大学では、「教員の教育力量向上のための組織的営み」と捉え、授業運営の改善に的を絞った取組みをされているようです。

講座は、講師である、Cynthia B. Weston マギル大学教授から、課題や討議のフレームなどが次々に示され、参加者が、日頃の取組みを示されたフレームで整理しながら紹介し、それについて討議するという形式で進められました。佐藤 浩章 愛媛大学教授がファシリ

テーターとなって、参加者の意見を次々に引き出して整理していきます。特定の模範解答はありません。参加者はそれぞれの大学でFD活動に取り組まれている先生方ですから、それぞれが解答をお持ちですし悩みもお持ちです。討議をすればするほど、悩みが解決され、「解答」の質が高まっていきます。実はこの手法を身をもって体験することが、この講座の獲得目標だったのです。

先生方の授業改善の取組みを持ち寄れば、悩みはいつか解消され、もっと高度な授業改善ができるはずです。センターがそうした取組みの核になれるよう、この講座で学んだことを活かしていこうと思います。(山田)

紀要の原稿を募集しています

大学教育開発・支援センターでは、紀要『立命館高等教育研究』第8号に掲載する原稿を募集しています。募集要項は下記の通りです。投稿希望の方は、より詳細な「執筆要領」・「投稿規程」と「投稿申込書」を送付いたしますので、センターまでご連絡ください。

学内教職員の皆様からの多数のご応募をお待ちしています。



応募資格	立命館大学および立命館学園の教職員
掲載内容	立命館大学および立命館学園をはじめとした大学や教育機関の教育や教育実践に関する論文
字数	論文、実践研究、報告、ともに20,000字以内 ※上記字数には本文・注・図表・参考文献などを含む ※1頁:42字×39行の1段落
応募申込	「投稿申込書」に必要事項を記入の上、事前にセンター事務局に提出
原稿締切日	2007年11月30日(金) ※当日消印有効
発行(予定)	2008年3月31日(月)
注意事項	1.原稿は原則としてワープロによる横書きとし、原稿の提出は印刷物とフロッピー等のデジタルデータとする。 2.投稿原稿の表紙に和文および英文の併記で、表題、投稿者の氏名、所属機関、肩書きを記入する。 3.投稿原稿には8項目以内のキーワードと約400字以内の要旨を和文および英文で付ける。 4.投稿原稿の採否は、編集委員会が委嘱する査読者の審査に基づき、編集委員会が決定する。 5.採用原稿の執筆者校正は初校、再校とし、校正時の大幅な原稿改訂は原則として認めない。 6.投稿原稿などは返却しない。

BOOK 新着図書情報



**初年次教育:
歴史・理論・実践と世界の動向**
濱名篤、川嶋太津夫(編著)
丸善
2006.11
4-621-07778-3



**大学生の学び・入門:
大学での勉強は役に立つ!**
溝上慎一(編)
有斐閣
2006.3
4-641-12282-2



**大学の戦略的マネジメント:
経営戦略の導入と
アメリカの大学の事例**
龍慶昭、佐々木亮(著)
多賀出版
2005.9
4-8115-7051-0



**大学で考える:
学力・入試・国際化**
慈道裕治(著)
文理閣
2007.2
978-4-89259-537-0



**スタディスキルズ:
卒研・卒論から博士論文まで、
研究生活サバイバルガイド**
Kathryn L. Allen(著)、伊藤俊洋(監訳)
伊藤佑子、黒澤麻美、吉田朱美(訳)
丸善
2005.12
4-621-07652-3



**大学は歴史の思想で変わる:
FD・評価・私学**
寺崎昌男(著)
東信堂
2006.11
4-88713-723-0



**大学教育の
エクセレンスとガバナンス:
絹川学長の教学経営ハンドブック
(高等教育ハンドブック4)**
絹川正吉(著)、高等教育情報センター(編)
地域科学研究会
2006.12
4-925069-31-4



**授業評価活用ハンドブック
(高等教育シリーズ140)**
山地弘起(編著)
玉川出版部
2007.4
978-4-47240-337-8



**大学のイノベーション:
経営学と企業改革から学んだこと**
坂本和一(著)
東信堂
2007.5
978-4-88713-740-0



立命館大学
大学教育開発・支援センター

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
◎TEL:075-465-8304 (内線:511-7145) ◎FAX:075-465-8318 (内線:511-7149)
◎e-mail:fd71cer@st.ritsumei.ac.jp

<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/ac/kyomu/cer/>

発行日:2007年7月4日 編集・発行:立命館大学 大学教育開発・支援センター